松本清張全集 47

松本清張全集 47

文藝春秋

松本清張全集47　　彩り河

定価　1800円

1984年3月25日第1刷

著　者　©松本清張

発行者　西永達夫

発行所　株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23

電話(代表)03—265・1211

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします　0393-508090-7384

彩り河　3
解説　権田萬治　469

装幀　伊藤憲治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彩り河

首都高速料金所

五月十六日の夜九時ごろである。この時刻、首都高速道路霞が関料金所は中だるみといった状態である。十時半になると、料金所は乗用車で混み合いはじめ、十一時から一時までが混雑のピークとなる。銀座のナイトクラブ、キャバレー、バー、飲み屋などの客が帰宅するころだった。

ラッシュになると、料金所の入口に車が無秩序に殺到する。ここにはブースと呼ばれる赤塗りの、細長い、ちょうど列車の車輛のような通行券授受施設が四つある。内回り線に二つ、外回り線に二つ。そのいずれも全開となる。車の群れは南の官庁街の坂道を上ってくるのと、西南の虎ノ門方面からくるのと、西の赤坂方面の道を上ってくるのと、さらに東の有楽町方面から国会議事堂前を回ってくるのとがある。車の四つの川がゲートの前で合流して溜まり、洪水のようになる。ドライバーたちは一秒でも早く料金所の前に近づこうとひしめき合う。その前方がトンネルに入る下り坂となっているので、あたかも狭い下水管の入口に溢れた水が少しずつ奥へ吸いこまれて行くぐあいだった。料金所の年とった係員がてんてこ舞いする時間帯である。

それが二時間後にせまっていた。ゲートを通過する車がしだいに増えていたが、まだ列をつくるほどでもなかった。係員たちは、坂下に遠くひろがる街の灯と、夜空に黒々とそびえる議事堂前の木立の皺を浮かした外灯を眺める余裕が十分にあった。

井川正治郎は内回り線ブースの赤い箱の一つにいた。事実、これは車輛といっていい。ほぼ三分の一に仕切った前方が料金徴収の実務室で、後方三分の二にロッカー、着替え室、湯沸かし場、トイレなどが付く。その横がせまい通路になっているのも、車輛製造会社が寝台車の要領で製作したと想像できる。普通はブース一つに定員二名の係が詰めている。

窓口に立つ一人は回数通行券の一枚をドライバーから受けとる役だった。現金を出す乗用車には四百円と引きかえに領収券一枚を手渡す。新たに回数券を求める客には綴込みの一冊を渡す。横には計算係が机の前に坐っている。机の上には剰り銭が用意してあって、客が出す一万円札、五千円札、千円札に応じて即座に支払いが出来るように区分し積まれていた。窓口に立つ者を「立ち番」、計算係を「坐り番」と云い慣わしていた。「立ち番」と「坐り番」は三十分交替だった。「坐り番」の机の中にも剰り銭の準備がしてあった。午前八時の勤務開始前に会社から現金が渡されている。係は二十四時間勤務で、朝八時から翌朝八時までだった。交替はそのときで、下番した者はその泊り明けの日と翌日が公休となっている。三日目の午前八時の出勤には、また別な料金所に配置される。こういう勤務の回転であった。

料金所の係員は首都高速道路公団に直属しているのではなかった。彼らが所属しているのは、その業務を公団から請負っている民間会社で、これは十三社あった。一社について料金所をそれぞれ八つか九つくらい担当していた。したがって一社の係員が料金所の勤務を一巡するには二十四日か二十七日くらいかかる。

井川正治郎は、一年前にその委託会社の一つに応募して採用された。

勤務員は会社を定年で退職した年配の人々ばかりだった。仕事は老人むきだ。初任給十三万円、昇給して月額平均十八万円になる。ボーナスは年間五十三、四万円である。年寄りの再就職にしては優遇のほうだ。

採用にあたっては本人が資性温厚であることと、身元が確実であることが条件である。五十五歳以上だとたいていい温和になっている。人生に対する「諦め」に近い。圭角(かど)はとれている。再就職にあたっては、「家でぶらぶら遊んでいても退屈で仕方がない」「少しでも身体を動かしていないと老化がすすむ」「まだ心身ともに若い。もっと働きたい」「自分の小遣い銭ぐらいは自分でかせぎたい」「老後の再就職にしては仕事が楽だし、外聞も悪くないから」というのが応募者のほとんどの理由であった。

井川正治郎の履歴書を見て、考査にあたる会社の人事課長は彼にきいた。

「五十六歳ですね。京都大学経済学部卒。ほう、五十歳で東洋商産株式会社の取締役兼管理部長をお辞めになっていますね。東洋商産といえば一流の会社じゃありませんか。どうしてお辞めになったんですか」

「一身上の都合です。具体的にいえば、たとえ役員にさせてもらっても会社勤めを続けるよりは自分で仕事をしたくなったのです。それに、わたしの才能からしても、東洋商産で常務になるような希望もありませんから。五十五を過ぎて、ヒラトリ(平取締役)のまま解任されるよりも、思いきって自分の会社をつくりたくなったのです」

「一年後に大阪で貿易関係の会社をつくられていますね」

「わたしはそこに書いてあるように兵庫県の生れで、大阪に知人が多いのです。京大に入ったのもそのためです」

「で、その会社も三年で解散されていますね」

「やはり見通しが甘かったのです。大きな組織にいるのと、外へ出て独力でやっているのとでは万事が大違いでした。それで東京に妻と共に引き揚げました。二年間遊びました」

「料金所勤務ははたで見るほど楽ではありませんよ。三日に一回が二十四時間勤務ですからね。隠居仕事と思われたら大間違いです」

人事課長は、六十歳には見える井川正治郎の顔を眺めた。

「わたしはこれでも健康には自信があります。毎朝一時間はジョギングをしています。わたしの家は中央線の国分寺ですから、府中街道を走っています。三日に一度の二十四

時間勤務ぐらいはちゃんと出来ます。まだ隠居の心境ではありません。深夜には、仮眠もあるのでしょう？」

井川正治郎は背骨を立てるようにして云った。

「交替で仮眠が五時間ほどできます」

「それなら大丈夫です。勤務あけの二日間は休みですからね。いまのように家でぶらぶらしている状態では、精神も身体もいかれてしまいます。ぜひ働かせてください」

井川は、再就職志望者のだれもが云うようなことを述べた。

「しかし、東洋商産のような会社の重役さんをご自分からお辞めになったのは惜しいですな」

人事課長は井川の履歴書にもう一度眼を落して云った。

井川はすぐには答えられなかった。人事課長の表情には、井川がその一流会社を自発的に退社したのは、社内の派閥争いに敗れたのではないかという推測が浮んでいた。常務になれる見込みがないと洩らした彼の一言がその暗示になっている。事実は、そのとおりであった。

「料金所の勤務員には、大企業の幹部だった人や、部長クラスだった人が居られます。新聞記者や役人だった人なども居りますよ」

人事課長は、それらの人たちの経歴からも井川を察していた。

「なかには過去の栄光をひけらかす人がないでもありません。それは困るのです。ここに入られたら、まあ昔の軍隊と同じでしてね、以前の社会的地位はないことにして、無心で働いて下さい」

わたしは敗残者です、と口から出かかったのを井川は云い直した。

「以前のことはみんなもう記憶から消えています。ここの定年は六十歳でしたね。あと四年は十分に勤められますよ」

「定年は六十歳ですが、健康な方は六十五歳まで延長できますよ」

入社後の二週間ほどは研修期間だった。それが済むと各料金所に順々と配置されるローテイションに組み入れられた。

車の通行が激しい料金所のブースは大型で、わりあい閑散な料金所のそれは小型になっている。勤務員たちは大型のを「巡洋艦」と呼び、小型を「駆逐艦」と称していた。軍隊経験者が多いので、そういう呼称を使っていた。人事課長が「ここに入ったら軍隊と同じで、前歴を忘れ、みんな平等だと思いなさい」と云った言葉に思いあたった。

勤めはじめて分ったことだが、勤務者はいずれもある意味で和気あいあいとしていた。というのは、だれもが年とっての二度の勤めという同じ境遇からくる親近感があるからであった。もう浮世の欲も得も捨てている。家に蟄居する退屈脱れと自分の健康のためと割り切ってしまえば、同僚間の競争も何もなかった。ここでは出世の道もない。ま

してや派閥も存在しない。
が、この近親的な「団結」も、一皮むけばお互いが自分の境遇そのものを相手に見ているようで、自己嫌悪に陥りやすく、深い交際にはなれないのである。友情はブースの中だけであって、外に出ればそれが消えてしまうような状態であった。いうなれば彼らの間は至極淡々としていた。
雑談といえば、当り障りのないものに限られていた。軍隊経験者は、陸軍ならば大陸の戦場やインパール作戦の戦場を語った。海軍ならば東南海域の戦場やラバウル基地の話などをした。みんな部分的な話で、笑い声は伴わなかった。青春は悲惨な埋没の中にあった。
「ありがとうございます」
「ご苦労さまです」
窓口の「立ち番」は通行券を受けとるたびにドライバーに云う。直接に客に接するだけに、叮嚀に、と教育されていた。
トラックの運転席は、窓口と同じ高さとなって運転手の顔と対い合う位置になる。大型トラックだと見上げるようになる。乗用車の運転席は低いからこちらから見下ろすようになる。井川の経験だが、ドライバーは通行券を握った手を窓口へむかって突き出すだけで、徴収員の顔を見ようともしなかった。現金を出して領収券や回数券と剰り銭とを受けとるときも同じであった。一秒も早く料金所の前を通過したい運転者の心理もあったが、こちらが制帽・制服という機械的な人間だからである。鉄道員、郵便配達人、警官、ホテルのボーイなどと同じに制服に人間の存在がかくれていた。いわば「見えざる人間」であった。
そのため、車に乗った友だちも、近所の人もこちらの姿に気がつかなかった。帽子の庇が眉の上まで蔽い、頭髪のぐあいも額の特徴も隠されている。顔の上が無ければ、消えたのにひとしい。制服がさらに姿を隠している。それと、料金所に勤めていることを知らないのが多いから、まさかそこに居るとは考えてもいないのである。
この無機物ともいえる存在の虚しさはやはり侘しかった。仕事も自動販売機のように単調である。過去が終り、諦めの中に静かに生きているとはいえ、心の空虚はどうしようもなかった。
それを埋めるために、同僚の一人は語学を勉強しはじめた。活用する目的ではなく、自分の心を充たすためだった。ロンドン・タイムズが読めるほど英語をマスターし、フランス語、ドイツ語、スペイン語を克服した。ある者は哲学の勉強をしている。ある同僚は漢籍と取り組んでいる。「史記」「論語」「淮南子」「文選」にまで及んでいる。それが井川の今夜の同僚中田であった。中田は制帽を脱ぐと、尖った頭がきれいに禿げ上がっていた。そうした勉強は、すべて彼らの心の支えであった。口では、頭の訓練が脳の老化を防ぐと云っていた。
——午後九時の霞が関料金所である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井川は内回り線のブースにいて「立ち番」であった。内回り線は芝、飯倉、渋谷方面につながる。午後五時を過ぎると、この料金所の忙しさに備えて、二ブースの定員三名が二名増員されて五名になる。二名は七時ごろから仮眠所のベッドで五時間の仮眠に入っていた。この順番はお互いの話合いで決められる。

「坐り番」は中田であった。

一分間に三台の車が通過した。ラッシュにはまだ時間があった。「ありがとうございます」「ご苦労さま」と云える余裕はあった。忙しくなれば無言のうなずきになる。

白い乗用車のあとから赤い車がきた。国産車だが、外車なみの値段に近い高級車だった。運転席には女がすわり、横に男が乗っていた。女は濃いサングラスをかけ、派手な色の洋装だった。

料金所の前で停まって、窓口へ一万円札を握った手をまっすぐに伸ばした。一方の手はハンドルにかけている。

「九回券をちょうだい」

どの運転者もそうであるように、彼女は徴収員には一瞥もくれず、まっすぐに前方を睨んだままであった。こちらからは車の窓を見下ろす位置だった。

和子だ、と井川にはすぐにわかった。東洋商産を辞めてから七年ぶりであった。

井川は黙って一万円札をうけとり横の計算係の中田に渡した。中田が机の上の剰り銭をあらためている間に井川は帽子の庇を額に下げた。

とっさのことだったが、ある発想が彼に走った。彼は九回券の回数通行券の一回ぶんを指で切りとると、その緑色の表紙に鉛筆で一つのマークを手早く書いた。

中田が千円札六枚、五百円札一枚、百円硬貨三個を井川に渡した。井川はその金に回数券を添えて、女客の手に握らせた。指が震えた。その震える指に女の指が触れた。七年ぶりの感触であった。

女は何も気づかなかった。黙ってハンドバッグの中に回数券と剰り銭とをしまった。金の数だけは見たが、回数券には眼を走らせなかった。無言でアクセルを踏んでスタートさせた。

井川は窓から首をつき出して車の後部を見た。トンネルの奥に車が吸いこまれる直前、外灯の光が白いナンバープレートの黒い数字を浮き上がらせた。首を引込めると、すぐに数字をメモした。

動悸がまだ搏っている。助手席に坐っていた男とも七年ぶりの対面だった。いまは東洋商産の社長となっている高柳秀夫であった。七年前は井川と同じ平取締役で経理部長であった。あのころからみると、すっかり肥っていた。貫禄ができていた。

それだけではない。和子の横に悠然と坐っている態度が彼女との関係を語っていた。回数券と剰りとを和子が受けとる間も、彼女と話も交わさなければ、表情も崩しはしな

い。その落ちつきは夫婦の間と同じであった。
同乗している男が高柳秀夫でなかったら、井川に回数券の表紙に特殊なマークを書く着想が浮ばなかったかもしれない。たぶん黙って彼女を見送っただけで終ったであろう。
走り書きのサインは暗号であった。曾て和子がナイトクがナイトクラブに勤めているとき、二人が共同してつくり、他の客の前で素早く交わす愛の暗号であった。回数券の表紙に書いたのはその一つで、
《これからいつものところで待っている》
という二人だけのサインであった。
明日にでも回数券をハンドバッグからとり出したとき、和子はその表紙の暗号を見るだろう——。
「いまの車の女のひと、知っているんですか？」
回数券の表紙に暗号をつけることまでは気がつかなかったろうが、井川が窓から首を出して見送った様子などを見て、中田がきいた。
「いや、別に」
「そうですか」
次の車がきて窓の前に手を出していた。それがあとからあとからとつづいて忙しくなった。「坐り番」となった井川の頭は、半ば真空状態になって、金の計算を間違えそうだった。
中田があとからメモをくれた。
《越鳥眷恋して南枝を想ふ　文選》

女の家

午前八時、霞が関料金所の交替が終った。
首都高速道路公団に専属する民間会社のマイクロバスは受持ちの各ランプを回って、料金徴収員の交替員を昇降させ、港区白金にある東都ハイウエイ・サービス会社の料金計算所に戻る。
二十四時間の勤務を終った年寄りたち（五十五歳以上、六十五歳まで）は、バスの中にぐったりとなっている。腫れた眼をし、黒ずんだ脂が皮膚に浮び、皺が一日にして深くなったようだった。五時間の仮眠はあっても年には勝てなかった。白髪がふえてゆく。
服を着かえた井川正治郎は外に出る。これから家に帰ってゆっくりと寝て、明日は休養し、明後日は高樹町の料金所に勤務する。いつもだとそのようにして国分寺の自宅に電車でまっすぐに戻るのだが、今朝はその気になれなかった。計算所の近くでコーヒーを飲んだ。モーニングサービスでトーストが付く。それを半分齧ったところで店内の赤電話の前に歩いた。妻の秋子の声が出た。
「用事ができた。これからよそに回るからね。夕方までには帰るよ」
「大丈夫ですか。お疲れになっているでしょう？」
妻の声も年々嗄れてきていた。なるべく早く帰ってきて

くださいと妻は云った。

じつは仮眠の五時間が熟睡できなかった。昨晩は塞いだ眼に、車にならんだ和子と高柳秀夫の顔がちらつき、いつまでも消えなかった。七年の間に決定的な敗者となっている自分を知った。

動悸がしずまっていない。睡眠不足のためだけではなかった。あの光景を見た昨夜九時からの昂奮がつづいているのだった。

——和子は、九回券綴りの緑色の表紙に鉛筆で書き入れた暗号サインをいつ見るだろうか。あのときはそれに眼もくれないでハンドバッグの中に突込んだ。

眼もくれないといえば、こっちの顔も彼女は見なかった。料金所の老徴収員に注目するはずはないのだ。そのかわり自分は制帽の庇の下から和子の顔をよく見た。すっかりきれいになっている。七年間の経過が逆行していた。クラブのホステス時代貧弱だった彼女は、見違えるように充実した身体になっていた。あのときが二十五歳だったから三十二歳のはずである。充実しているのは豊かな身体だけではなく、それに付けたきらびやかな装身具と高級な洋服があった。光るような顔だった。垢抜けた化粧法でもあったが、白い皮膚の内側から光沢が出ている。

すべては運転する彼女の横に泰然として坐っている高柳秀夫の育成にちがいなかった。一万円札を受けとり、九回券と剰り銭とを渡す一分たらずの間だったが、両人は一言も話を交わさなかった。それぞれが自分の態度をつづけていた。しかしそれは夫婦のように安定した仲であった。余計な口をきく必要のないものだった。

和子の現在の生活が高柳社長の交際費で賄われているのはいうまでもない。東洋商産の社長交際費が相当潤沢であるのを井川は在社当時から知っていた。総務部長を務めたこともある役員だから、それくらいのことは手にとるように分る。それに高柳秀夫は前から派手な性格であった。

和子にはきっと銀座のナイトクラブをやらせているに相違なかった。その開店資金も経営費も社長交際費からの流用だろう。が、その店はあまり大きくないにちがいない。あまりに目立つと高柳社長は疑いを招くからだ。疑惑はどこまでも避けねばならなかった。しかし店内は豪華だろう。

井川は和子との関係を慎重に秘して、退社するまでだれにも知られずに済んだ。ホステスに出す金ぐらいたいしたことはなかった。大阪に行ったので、和子との間は自然と切れたが、高柳もそのことは今も気づかずにいるだろう。むろん和子が秘密にしているからだ。

「クラブ・ロアール」というのが彼女がホステスで働いていた銀座の店だが、そのころ高柳もよくその店を使っていた。高柳からいろいろと誘われているというのを井川はベッドで和子からよく話されたものだった。彼女のおかしそうな忍び笑いを聞くたびに彼は高柳に優越感をもち、寝物語では二人して高柳を嘲弄した。

大阪に去っている間に、和子を高柳に取られたと井川は知った。高柳が奪ったのではなく和子のほうから彼に寄って行ったのだろう。縁が切れたと同じだったから、井川が和子に抗議を持込む筋合いではなかった。井川に去られた和子がだれかを頼るのは当然だった。ただその相手が、在社当時からのライバルの高柳秀夫だったことに井川の衝撃があった。

和子がナイトクラブの経営者になっているとすれば、それは銀座にちがいない。昨夜首都高速道路霞が関料金所を通過したからである。ただ、それが午後九時だったのはいかにも早い。クラブやキャバレーやバーなどの帰り客が霞が関に殺到するのは十一時から午前一時ごろの間だ。してみれば、あれは高柳が営業の途中から和子を連れ出して、いっしょにどこかへ行くときだったのであろう。和子の化粧も支度もあきらかに店に出ていたときのものだった。

行くといってもいまさらホテルでもあるまい。たぶん和子の家であろう。住所はどこだろうか。あの高級車が通ったのは内回り線入口の料金所だった。環状線だと谷町、飯倉、芝公園のランプから浜崎橋ランプの内回りになる。高速二号線だと、途中で岐れて、天現寺、目黒、戸越のランプを経て第二京浜国道につながる。第三号線だと高樹町、渋谷、池尻、三軒茶屋、用賀のランプを経て東名高速道路につながる——。

九回綴りの回数通行券表紙に走り書きした暗号サインに和子は昨夜、家に帰ってハンドバッグを開いたときに気がついただろうか。それとも、今日の昼間にでも見つけるだろうか。

暗号は和子と二人で共同作成したものだ。《愛している》という精神的なものから《いっしょに帰ろう》《これからいつものところで待っている》という実行の打合せにいたるまで五、六種類があった。ちょっとみると、簡単な楽書に似ている。マッチ函の端、ナプキンの隅といったあり合せのものに鉛筆のすべったような線だから、だれにも分らない。昨夜和子に渡したサインは《これからいつものところで待っている》だった。

これからいつものところで待っている——サインが眼に入ったときの和子の驚愕が井川に想像できた。まるで亡霊が現れたような気がするだろう。どこで七年ぶりの暗号サインを渡されたかははっきりしている。霞が関料金所に曾ての男は立っていた。姿が見えなかったのも幽霊そのままだ。しかも対手はこっちの顔も、横に居る高柳の顔も凝視していた。

冷水を浴びせられたような戦慄のあと、激しい狼狽が和子を襲うだろう。料金所に来て井川の存在をたしかめる勇気はない。むろん高柳に訴えることはできない。それには井川との過去を告白しなければならなかった。そのことは和子の現在の崩壊になる。

《いつものところ》とは、新宿裏のラブホテルである。今

もその家はあるだろう。彼女にとって気味悪い恐怖であった。

和子はどうするか。道路公団に訊き合せて彼が詰めている料金所に電話してくるだろうか。昔の仲をとり戻すのではなく、別れたことを正式に云うためにである。七年前、別れ話をお互いがはっきりと交わしていなかった。井川が大阪へ行ったので、いわゆる去る者は日々に疎しのたとえで自然消滅の形であった。しかし、別れ話を明確にしておかなかったことは、中断的な継続をも意味する。一方から復活の宣言が可能なのだ。

だが、和子はたぶん電話してこないだろう。それは自滅につながりかねない、と彼女は思う。あくまでも沈黙を守るにちがいない。

井川は料金所で働くようになって一年になる。その間に、車で通過する和子を見なかったのはふしぎなようだが、しかしそれはあり得ることだった。

勤務は、各ランプの料金所を転々とする。霞が関に当るのは二カ月に三回くらいの割合であった。それも「坐り番」のときや仮眠の番のときは窓口に居ない。「立ち番」として窓口にいても、ラッシュ時には客の顔をのぞくどころではなかった。領収券を渡し、回数券を取る手もとの注意が精いっぱいであった。昨夜は、車が空いている九時に和子が通りかかったから彼女の顔を見ることができた。

和子からの電話が期待できない以上、こちらから接近してみようと井川は思った。

しかしこの時の彼には、彼女との仲を回復しようという気持はまったくなかった。こっちは負け犬である。いまさら女とヨリを戻そうとは思わないし、戻せる自信もなかった。ほんらいなら自分のほうがひっそりと姿を隠しているべきだろう。料金所の制服を着ているように。

ただ、何らかの形で和子にこちらの存在を知らせたい。存在は意志の伝達であった。それなくてはあまりに寂し過ぎる。

喫茶店で個人名電話帳を借りて繰った。山口和子というのが本名だった。「クラブ・ロアール」では「鈴子」と云っていた。本名を知っていることは強かった。

「山口和子」は電話帳に六つ載っていた。豊島・駒込二―一九、渋谷・広尾二―五六、板橋・赤塚二―三五、目黒・自由が丘二―三二、大田・田園調布四―七、足立・本木南一―二四。このうち豊島区、板橋区、足立区の山口和子は除外してよい。残るのは渋谷区広尾、目黒区自由が丘、大田区田園調布の三つだ。いずれも高級住宅街がある。

井川は、書き抜いた三つの電話番号に順次ダイヤルを回した。

広尾の番号では男の声が出たので、黙って切った。自由が丘では年とった女の声だった。田園調布では子供の声が出た。どれも井川からは口をきかなかった。

広尾の男の声は高柳秀夫かもしれない。彼の声はもう忘

れているし、電話では肉声と違っている。まだ九時すぎだった。昨夜から泊まった高柳が残っている可能性がある。出社前かも分らないのだ。迂闊には言葉が出せなかった。

和子の声なら七年前まで電話で聞き馴れていた。昨夜も料金所で「九回券を頂戴」と云った和子の声は以前のままである。ただ、それに貫禄のような調子が加わっていた。

自由が丘の声は太かった。五十以上と思える。和子の母親は早く死んでいる。田園調布は七、八歳くらいの女の児の声で、「もしもし、山口でございます」と云った。和子にはそんな子供は居ない。高柳との間に生れたとしても、せいぜい三つか四つのはずだ。

井川は喫茶店を十時に出た。まずこの白金から近い広尾の番地をたずね、それとなく家を見ようと考えた。広尾は天現寺のランプに近い。

広尾二丁目は以前からの屋敷町であった。ゆるやかな勾配の道の両側には、長い塀をもち、植込みの繁りをのぞかせた高級住宅がつづいていた。行く手に聖心女子大があった。

和子をひとりで住まわせるからにはしゃれた小さな住宅かマンションだろうと思った。該当番地に来てみるとマンションはなく、小住宅もなく、路地もなかった。「山口和子」の家は旧式の日本家屋であった。

井川は渋谷駅に出て東横線で自由が丘に向かった。電車の中ではさすがに身体がだるくなったが、神経のほうは冴えていた。自由が丘は高速道路だと目黒のランプになる。

自由が丘駅前で正午になった。駅前に昭明相互銀行支店があって、陳列窓に「人類信愛」の標語のようなものが出ていた。広尾を歩き回って時間をとったのと、脚が疲れくたびれていた。昭明相銀近くのコーヒー店に入ってひとやすみした。食欲はなかった。コーヒーの刺戟を必要とした。

女店員に自由が丘二丁目を訊くと、北の方角だという。商店街は狭く、高尚な感じであった。レストランと婦人服店とが目につく。坂道を上ると、商店街が切れてすぐに住宅街に入った。ここも緑が多かった。井川は車が通るたびに運転席を眺め、後部のナンバープレートを見送った。番号は昨夜料金所で書き留めてある。

この一画には大きな家が多い。生垣につつじが咲いていた。旧い屋敷町は近代建築の新住宅地に変りつつある。質屋があった。高級住宅街に質屋があるのはそぐわないようだが、この質屋も赤い化粧煉瓦の建物であった。小さな紺ののれんが看板代りに入口にさがっていた。

勤務明けの身体をひきずって坂道を上るのはこたえた。眼蓋の裏が渋を塗ったような感じであった。気は張っていても睡眠不足は争われなかった。

「自由が丘家政婦会」の看板が出ていた。この住宅街ではどの家も家政婦を必要とするのだろう。井川は、自由が丘の山口家の電話で聞いた年輩の女の声に思い当った。あれは母親ではなく、家政婦だったのではないか。希望が出て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com